50年前の舞台装置を再現した「新演出」《ワルキューレ》

創立50年を迎えた「ザルツブルク復活祭音楽祭」

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

4月8日から17日にかけて行われた「ザルツブルク復活祭音楽祭」。故ヘルベルト・フォン・カラヤンによって、ワーグナーの楽劇の上演を最大の目的に1967年に設立され、今年創立50年を迎えた。記念年の目玉は、芸術監督クリスティアン・ティーレマンの指揮するワーグナー《ワルキューレ》。なんと50年前の舞台を再現して「新演出」で上演するという。

集中力に貫かれたティーレマンの指揮

「50年前は季節外れの雪に見舞われた初日だった」とクリスタ・ルートヴィヒとグンドラ・ヤノヴィッツが遠い目で振り返るザルツブルク復活祭音楽祭は、4月8日、初夏のような太陽に祝福されて50周年を迎えた。

50年前の舞台装置を再現し、ブルガリア系ドイツ人のヴェラ・ネミローヴァが新演出したワーグナー《ワルキューレ》に観客は惜しげもなく拍手を贈った。ネミローヴァも「古い舞台装置で伝統にのっとりながら、現代人も共感できる折衷案を見つけるのが非常に困難だったが、苦労が実った」と満足げに話してくれた。

クリスティアン・ティーレマンの指揮は強靭な集中力に貫かれ、常に新しいインスピレーションを提示しながら、長丁場を振り切った。ドレスデン・シュターツカペレの音は研ぎ澄まされて、限界に挑戦するかのような弱音も美しかった。それもそのはず、ほとんどの首席奏者はバイロイト音楽祭の演奏体験者だという。終幕のヴォータンとブリュンヒルデの別れなど、長いスパンのレガートでも音楽の方向性と緊張感は失わず、リスクと隣り合わせで、演奏しきった後の感動は大きかった。

成功に貢献した歌手陣

その成功にはもちろん歌手陣も貢献している。ジークムントのペーター・ザイフェルトはさすがに声をセーヴするような箇所も多かったが、キメる部分では決して失望させることはない、ヘルデンテノールとし

芸術監督ティーレマンがウィーン・フィルを指揮した《第九》から ©OFS / Matthias Creutziger

全員が立派な歌唱を聴かせたワルキューレたち ©OFS / Forster

ての健在ぶりを示した。フンディンクのゲオルク・ツェッペンフェルトは瑞々しい声と明瞭な発音で「楽劇」を引き締めた。ヴォータンのヴィタリ・コワリョフはオーケストラを越える声量と柔らかさ、色気まで兼ね備えた現在最高のヴォータンの一人と言えよう。アニヤ・ハルテロスは、柔らかい声で歌う清楚なジークリンデが、愛に賭ける情熱を得た後、母としてお腹の子を護る強さに至るまでの成長を声で聴かせた。ブリュンヒルデのアニヤ・カンペは危なげな部分もあったが全力投球し、フリッカのクリスタ・マイヤーは余裕を持って歌い切った。またティーレマンが記者会見で自慢気に言及した通り、ワルキューレの全員が立派な歌唱を聴かせた。

「キャストの3人が当音楽祭デビュー、ラジオ中継もあるという状況でも、ネガティヴな緊張感は、どのセクションからも感じられなかった」と語るティーレマン自身が、実は開演直前は氷のように冷たい手をしていたと団員が教えてくれた。そんなすべてが実った大成功であった。

ウィーン・フィルとバイエルン放送響、他

その他、ハルテロス、マイヤー、ザイフェルト、ツェッペンフェルトのソロでウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と共演したベートーヴェン《第九》も、ティーレマンのベートーヴェンへのアプローチをウィーン・フィルで実現するという点に、一種の意義が感じられた。多少野暮だが奥深い《第九》で、各楽器の旋律が語りかけるように何重にも重なって紡ぎ合わせる。ソロもハルテロスが多少テンポに乗れていないほかは豪華だった。

続いてバイエルン放送交響楽団のフォーレ「レクイエム」とサン=サーンス「交響曲第3番《オルガン付き》」を聴いた。この演奏会の主役は、豊かな倍音を持ちつつ、完璧に統一された合唱団だった。それに引き換え、ソリストはアンナ・プロハスカもアドリアン・エレードも、いつになく息が流れず、声が喉に貼り付いたようで、音程も低めだった。チョン・ミョンフンの指揮という観点から見ると、静と動の両極を聴けるプログラムだった。

変わり種では、サルヴァトーレ・シャッリーノの室内オペラ《ローエングリン》も、サラ・マリア・スンという最適な演者を得て、興味深い上演となった。

バイロイト音楽祭とウィーン国立歌劇場との間に確執のあったカラヤンが、故郷で最高のワーグナー・オペラを上演するために、演出にも隅々まで心を砕き、自費で始めたこの音楽祭が、今日これだけ多角的になり、皆に愛でられているさまを見たら、大満足であろう。

横たわるブリュンヒルデ（中央上、アニヤ・ケンペ）は父ヴォータン（中央下、ヴィタリ・コワリョフ）によって炎に包まれる。大成功をおさめたティーレマン指揮《ワルキューレ》のシーンから ©OFS / Forster